

周樹人『中国地質略論』（上）

ーリヒトホーフェンの炭田についての言説ー

丸 尾 勝

一 はじめに

周樹人、後の魯迅は1902年南京の鉱務鐵路学堂を卒業し、東京の弘文学院に入学し、1903年『中国地質略論』を著わし、同郷誌『浙江潮第八卷』に発表した。この『中国地質略論』の趣旨は、列国に侵略され石炭が狙われ衰退していく中国の現状に危機を覚え、ほとんどの中国人は侵略に抗議しないばかりか売国奴まで現れて焦燥を覚え、その対策として、中国の地質、地史等を講じ、多くの炭田の所在を示すことにより、自力で炭田を開発し、その石炭を使って諸産業を興し、石炭が列国に奪取されないように図ることであった。

この作品について従来それほど重視されていないのか、1952年唐弢により『魯迅全集補遺続編』に収められて⁽¹⁾、やっと1981年版『魯迅全集第八卷集外集拾遺補編』に収められた。

中国では、『中国地質略論』についての論文は3、4本程見られ、日本では管見では見られなく、ほとんど注目されない作品のようである。

しかしながら、列国の侵略による中国分割支配、清国政府の無能無策、大部分の中国人の侵略に対する無抵抗、一部の売国行為、中国人の自国の資源や鉱山についての理解のなさという自国の現状を知り、自然淘汰の進行により弱国が衰亡する危機にあると認め、この危機を回避する救国救民が緊急の課題であると受け止めたことにおいて、自力で炭田を開発しその石炭を使って諸産業の振興を図ることにより、石炭が列国に奪取されない方法を提示したことにおいて、このように現実を直視し、率直に現状を認め、深く洞察し、的確に対処していく周樹人の姿勢が見られたことにおいて、その他、魯迅流進化論の具体的内容が見られたこと、中国人による早期に多くの炭田が示されたこと、先駆けとなる中国地質学や地史学等の説明が見られたこと、及び、

風水・家相・迷信などから科学的説明により覚醒させる方法が見られることなどにおいて重要な作品である。

『中国地質略論』の材源の対象となるのは、大きく分けて、中国の炭田の所在・分布・埋蔵量などについて、列国の侵略事件や売国事件及び侵略や売国に対する闘争について、中国や東アジアの地質、地層、地史などについてと、三部分に分かれる。侵略事件、売国事件、侵略・売国に対する闘争については、ほとんど既に『中国地質略論』（『魯迅全集』）の『注釈』で、また、学習研究社の『中国地質略論』の『訳注』で説明されている。炭田の所在・分布・埋蔵量などの材源は多くは矢津昌永の資料やリヒトホーフエンの資料に拠っている。その矢津昌永の資料も多くはリヒトホーフエンの資料に拠っている。リヒトホーフエンと炭田の関係を論じた中国の論文があるが、彼の炭田などについての言説の材源を直接彼の著作に求めるのではなく、多くの関係諸書籍や諸論文からの転引に頼っている⁽²⁾。本論文は『中国地質略論』における炭田に関する言説、とりわけリヒトホーフエンの炭田の言説について、その材源を探りながら上述したいいくつかの重要なことに迫っていく。材源を求めるのは、何をどのように取り何を捨て、どのように解釈しどのように表現したか、読んだであろう材源の関連の資料からどのような影響を受けたかなどがわかってくるからである。

『中国地質略論』は、1981年版人民文学出版社の『魯迅全集第八卷』『集外集拾遺補編』に収められた作品を用いる。以下、『中国地質略論』は『略論』という略称を用いる。

なお、原題、原文中に「支那」という言葉を用いている場合はそのまま用いる。

二 『中国地質略論』について

(1) 1903年『略論』執筆前後の時期における周樹人について

周樹人について、1984年中日戦争の頃より、1989年南京の学校で学び、1903年『略論』を執筆する頃までの間で、学習、語学学習、読書、翻訳、出版活動、影響を与えた事件などを、また、歴史的事件や列国の中国侵略の動向には〔 〕を付けて、『魯迅年譜』の中から抜き書きする⁽³⁾。

1894年〔7月中日甲午戦争起きる〕。〔11月孫文米国で『興中会』を設立〕。1895年〔4月清国敗戦で『馬関条約』を結び、列強の中国分割進む〕。1896年〔漢口・蘇州・杭州等に租界ができる〕。1897年〔旅順『天演論』発表〕。〔11月ドイツ、膠州湾占領〕。1898年〔2月～4月清国政府、列強の要求を次々承認。膠州湾は独、旅順大連は露、九龍半島・威海衛は英が租借〕。2月周樹人、諸暨事件を知る。3月五国の中国分割の現状を知る。5月『江南水師学堂』に入学、周樹人と改名、英語・ドイツ語等を学習。〔6月百日維新〕。〔9月戊戌政変〕。10月『江南陸師学堂附設鉱務铁路学堂』に入学。12月四弟夭逝。1899年より学堂の本務の鉱業を中心に鉱物学・地質学・化学・熔煉学・格致学（物理学）・測算学・絵図学（製図学）等を学ぶ。学堂指定のドイツ語を習う。教科書は、頼耶尔（Lyell）の『地質学綱要』の訳本『地質浅説』、代那（Dana）選瑪高温口訳華衡芳筆述の『金石識別』、『全体新論』、『化学衛生論』等であった。1900年〔8月八国連合軍北京攻略、西太后・光緒帝西安に避難〕。〔10月孫文起義〕。1901年周建人によれば周樹人は帰郷の際鉱石標本を持ち帰ったと言う。3月祖父釈放。〔9月清国政府、11国と不平等な辛丑和約を締結〕。〔9月清国政府、留学生の選抜派遣の発令〕。〔11月西太后・光緒帝北京に戻る〕。11月青龍山炭鉱に行く（『中国鉱産誌』『本論第六章江蘇省鉱産第二節非金属炭炭』に、「青龍山炭鉱二炭坑有る、産出量比較的多い、今は廢鉱。」とある。）赫胥黎（ハックスレー）著嚴復訳述『天演論』、『時務報』、『訳学彙編』、加藤弘之著『物競論』などを愛読する。1902年1月『鉱務铁路学堂』を卒業。〔1月英日同盟条約を結び、日本は露国と共に東北部を伺う〕。〔2月梁啓超、横浜で君主立憲の『新民叢報』創刊〕。〔4月章太炎等、妨害により『支那亡国二百四十二年記念会』を横浜で開催。また章太炎・蔡元培等、上海で『中国教育会』を組織〕。3月張協和・芮石臣（顧琅）等と日本留学に出発。4月東京の『弘文学院』に入学。顧琅は学友。〔11月『浙江同郷会』の設立、『浙江潮』の発刊の決議〕。〔12月孫文、日本に『興中会分会』設立〕。1903年〔3月『中露西藏鉱山条約』を締結〕。〔4月露国、東北部を占拠する要求を提出し、奉天を占拠、留日学生、集会で『拒露義勇隊』の結成を決議〕。6月『斯巴達之魂』（『浙江潮第五・九期』）と『哀塵』（『浙江潮第五期』）発表。〔7月『蘇報』事件で鄒容・章太炎逮捕される〕。10月『説

鉦』と『中国地質略論』（『浙江潮第八期』）発表。10月『月界旅行』出版。12月『地底旅行第一・二回』（『浙江潮第十期』）発表。1904年〔2月日露戦争起きる〕。〔2月黄興・陳天華等、『華興会』設立〕。4月『弘文学院』卒業、7月祖父死亡、9月『仙台医学専門学校』入学。〔11月蔡元培・陶成章等『光復会』設立〕。

周樹人は上記のように、列国による中国侵略に関心が深く反感を持っていたこと、鉱業に関心があり鉱物学や地質学等を学んだこと、『鉱務鉄路学堂』での学習やその後の学習でドイツ語文が読めたことなどが確認できる。ドイツ語の学習やドイツ語の書籍の閲覧、購入については、周作人の『魯迅の故家』に詳しい⁽⁴⁾。

(2) 『中国地質略論』の内容、及び『地学残稿』について

『略論』は1903年『浙江潮第八期』に筆名『索子』で発表された。上記(1)の通り、1903年6月に『斯巴達之魂』と『哀塵』両方を発表し、10月に『説鉦』と『略論』両方を発表し、この月に『月界旅行』を出版し、12月に『地底旅行第一・二回』を発表とたいへん多忙であった。また、『略論』は、ドイツ語などの材源となる資料を探し読みこなし検討をし構想を練り執筆をするというたいへん手間のかかる作業を要した。これらのことから、周樹人には早くから、列国の中国侵略の対策として自力で鉱山の開発、採掘ができるように仕向ける『略論』の執筆の意欲があり、その準備をしてきたことが伺える。

『略論』の趣旨は上記第一節で述べたが、もう少し詳しく次に述べる。「中国は中国人の中国である。外国人が中国を研究するのはよいが、探検するのは許せない。外国人が賛嘆するのはよいが、野望を抱くのはゆるせない。」⁽⁵⁾と、外国の地質学者の踏査により豊富な石炭を外国に狙わせることに対する怒り、その石炭などを狙って列国が次から次へと侵略してくることにに対する警戒感、大部分の中国人が侵略に対して無抵抗である失望、一部の中国人による売国行為に対する怒り、外国人に抵抗する一部の中国人への期待、侵略により国が滅亡しようとする恐れ、それに対する募る救国救民の思いが述べられる。中国の石炭が列国に奪われない対策として、大衆を結合させて立ち

上げ産業を振興させて、炭田を開発して消費させていく提言をする。そのため、満州と九省の炭田の所在・分布を示し、中国には豊富な石炭があることを知らしめ、また、その石炭の開発、採掘に必要な中国の地質の分布、地質上の発達、地史などを講じて、自力で炭田の開発、採掘へ導こうとする。清国政府への批判は直接言及していないが、外国人に反抗する中国人を処罰し、また、衰亡の事態を招いたことで批判を含ませる。

なお、南京の『鉱務鉄路学堂』、東京の『弘文学院』の同学であり、『東京帝国大学工学部』へ進学した顧琅と共著の『中国鉱産誌』が1906年に出版されている。この作品は、『前書き』、『序』、『例言』があり、後ろに、『附録』として『中国地相図 山系と水系』、『地質時代一覧表』、『中国鉱産一覧表』が付き、さらに、『農工商部推薦』、『農工商部 教育部鑑定』、『本書、資料募集の広告』などが付き、これらは『略論』にはなく、国民必読書として体裁、形式が整っている。その趣旨は、『略論』と同じで、鉱物が奪取されないために、鉱山の所在の知識や地質学等が必要で、その先鞭を切るということである。その『本論』には十八省の鉱産の所在が各鉱物名に分けられて掲載されている。これらを地図に表した『中国鉱産全図』が附録として付く。この作品には清国政府を批判した文は見られない。なお、顧琅は『東京大学工学部』を卒業後帰国し、鉱山関係の教職、役職に就き技師として働き、後に『中国十大鉱廠調査記』を著わす。

また、『地質学残稿』という原稿がある。「地殻第二 壺石 一火成石 二水成石 三変成石 式地殻の構造 一 二気 三生物」という目次で、手稿で、句読点が付き、1903年頃作成とわかっている⁽⁶⁾。

三 リヒトホーフエンについて

『略論』の『第二 外国人の地質調査』で、リヒトホーフエンを紹介し、旅行の行程を説明し、三冊の報告書を作成したと述べる。『中国鉱産誌』の『例言』で、「中国の地質はいまだかつて調査されたことがなく、調査の最も詳しい人はまずもってドイツ人リヒトホーフエンを挙げねばなるまい。」⁽⁷⁾とし、リヒトホーフエンが中国地質の第一人者であると認めている。当時リヒトホーフエンが中国地質の第一人者であり、彼以降の地質学者は彼の学説を

必ずと言ってよいほど重視した。章鴻釗は『中国地質学発展小史』で、「彼ら（キングスミル、ビックモア）はいずれも中国の地質方面に関してかなりの報告を発表したが、しかし、ドイツ人リヒトホーフエン氏の踏査の普遍さ、著述の精密及び博大さには遠く及ばなかった。」と、彼の中国地質学における貢献を認めている⁽⁸⁾。周樹人や顧琅も同じで、彼の言説を各所に引用している。そこで、以下にリヒトホーフエンという人物、その旅行やその著作について述べる。

(1) リヒトホーフエン

『リヒトホーフエン伝』の、ドリガルスキーの『遺された偉大な足跡』によれば、フェルディナンド・フライヘル・フォン・リヒトホーフエンは1833年ドイツに生まれる。地質・地理学者。セイロン、日本、台湾、フィリピン、シヤムとアジア旅行をした。1868年までアメリカで地質調査に従事し、始めはカリフォルニア銀行の援助によって、後に上海の歐美商業会議所の援助により1868年より1872年まで中国で七回の旅行をした。この間、殺人罪を犯し亡命していたスプリングェルトが通訳や案内などの仕事をこなした。孤独な遍歴者が興奮しやすい民衆に囲まれた時、静かな足取りでその中を進み難を逃れたのは彼の人格によると言う⁽⁹⁾。上海の歐美商業会議所より資金援助を受けたので、英文の旅行報告書を送ったが、これが下記三(3)のD『リヒトホーフエン男爵の報告書1870-1872』である。1872年帰国後、下記三(3)のA1『中国第一巻』、A2『中国第二巻』、A4『中国第四巻』、B1『中国地図第一巻』とC『山東とその入口膠州』を著わした。『中国第四巻』は各専門家の執筆による。1905年に死亡し、その後、夫人、友人、教え子等により、A3『中国第三巻』、A5『中国第五巻』、B2『中国地図第二巻』とE『リヒトホーフエンの中国旅行日記』が出版された。

(2) 七回の中国旅行

リヒトホーフエンは七回の旅行を通じて各所の炭田を踏査し地質を調査し各地を見聞し、そして、考察する。周樹人は『略論』の『第二 外国人の地質調査』において、リヒトホーフエン等を紹介し、七回の中国旅行の行程の

概略を説明している。が、その行程の順番などは間違っている。七回の旅行行程については、『中国第一巻』の『中国における著者の旅行の梗概』に書かれている⁽¹⁰⁾。また、『中国における著者の旅行の梗概』の次の頁に『中国各省と著者旅行路』の地図が載っていて、太い線と矢印で行程が示され、1から7の旅行回数番号が付いている。この七回の旅行の概略を、リヒトホーフェンの『中国旅行日記』により補いながら、述べる。

リヒトホーフェンは1868年7月サンフランシスコを出航し、8月横浜に着き、9月上海に着く。旅行前に北京へ行ってドイツ公使の世話で総理衙門より旅行証明書を得る。荷車を引き、民衆に取り囲まれ洋鬼子と罵られ投石を受ける困難な旅行の中で、「李」という名前のこの旅行証明書が李鴻章家の関係者を思わせたのであろうか、難を逃れることがあった。

第一回 1868年11月2日～同年12月25日。浙江省と江蘇省。上海、船で寧波、舟山列島、紹興、錢塘江、杭州府、太湖、蘇州、丹陽、鎮江、南京、上海。

第二回 1869年1月8日～同年2月21日。揚子江下流地方。上海より船で長江を漢口まで遡上、鄱陽湖、南京、鎮江、上海。宣教師ウィリヤムソンの論文を読む。雇ったベルギー人スプリンゲルトは、通訳、交渉などの仕事などをこなし大いに助けとなる。

第三回 1869年3月13日～同年7月19日。山東省と遼寧省。上海、大運河、沂州、済南、博山、芝罘、英国軍艦で営口へ、遼東半島、沈陽、錦州、山海関、北京へ、天津、船で上海へ。

第四回 1869年9月24日～同年10月31日。江西省と浙江省。上海、九江、鄱陽湖、樂平、景德鎮、祁門県、上海。

第五回 1869年12月下旬～1870年5月30日。広東、湖南、湖北、河南、山西、直隸の各省。上海より船で広東へ、北江、韶州、衡州、長沙、洞庭湖、漢口、樊城、魯山、汝州、河南府、懷慶府、平陽府、太原府、獲鹿県、北京。広東から雲南、北中国、西北中国を回る計画は治安が悪いため断念。また、北京、陝西、甘肅、四川、雲南、広西、広東への行程は天津虐殺事件が起こり、外国人殺害の恐れ、対外国戦争勃発の恐れのため断念。北京を去り、上海から横浜に行く。西日本の旅行後、上海に戻る。資金を提供してくれた上

海英美商会への『旅行報告書』の送付が始められる。

第六回 1871年6月12日～1871年8月8日。浙江省と安徽省。上海、船で寧波へ、東陽県、錢塘江、桐廬県、宣城、蕪湖県、鎮江、丘陵地帯の踏査、上海。

第七回 1871年10月25日～1872年5月21日。直隸、蒙古、山西、陝西、四川、湖北の各省。北京、宣化、張家口、大同、五台山、太原府、潼関、西安府、回教徒の反乱のため甘肅省は断念、秦嶺山脈越え、漢中府、成都府、雅州、雲南へは治安問題等で断念、叙州、漢口、上海。

(3) 著書とその訳書

『略論』作成の1903年までの著書には○を付ける。また、以降これらの記号を用いる。リヒトホーフエンは1905年に死亡し、それ以降の出版は夫人、友人、教え子等による。

○A1『China Vol.1 (中国第一卷)』(『China ; Ergebnisse eigener Reisen und darauf gegründeter Studien—中国 ; 私の調査成果とそれに関する研究』、Berlin;D.Reimer、1877年)

A1—1『支那 I—支那と中央アジア』(東亜研究叢書第14巻、望月勝海・佐藤晴生訳、岩波書店、1942年、A1の「第一編第一章支那と中央アジア」の訳書)

A1—2『北支ニ於ケル黄土地域及ソノ中央亜細亜トノ関係』(中田吉雄・新井浩訳、東亜研究所、1939年)(A1の「第一編第二章黄土地域とその中央アジアとの関係」の訳書)

○A2『China Vol.2 (中国第二卷—北中国に関する記録)』(南満州・東北中国・西北中国、1882年)

○A2—3『Analysen chinesischer Steinkohlen (中国の炭鉱の分析)』(A2の784頁の後にある表で、リヒトホーフエンが標本として持ち帰った60箇所の石炭の成分分析表で、「Anthracite (無煙炭)」と「Bituminöse Kohlen(瀝青炭)」に分けられている。この表の炭田名は、リヒトホーフエンが標本として持ち帰ることができなかった炭田もあるので、彼の訪れた炭田すべてではない。)

- A2—4『山東省山岳地質』（興亜院政務部調査資料第四号、土方定一・橋本八男訳、1940年、A2の「第二部東北支那の第五章・第六章山東省」の訳書）
- A3『China Vol.3（中国第三卷—南中国に関する記録）』（西南中国・西藏・東南中国、1912年、Tiessenにより刊行）
- A3—5『支那V—西南支那』（東亜研究叢書第18巻、能登志雄訳、岩波書店、1943年、A3の「第一編西南支那—四川・貴州」の訳書）
- A4『China Vol.4（中国第四卷—先史時代）』（1883年、Damesによる遼東産の寒武紀三葉虫以下、各専門学者の執筆による動物・植物化石の説明）
- A5『China Vol.5（中国第五卷—地層学的記録）』（Frechにより刊行、1911年）
- B1『Atlas von China Vol.1（中国地図第一卷—北中国）』（『Atlas von China: Orographische und geologische Karten』、1885年）
- B2『Atlas von China Vol.2（中国地図第二卷—南中国）』（1912年）
- C『Schantung und seine Eingangspforte Kiautschou（山東とその入り口膠州）』（Berlin: D. Reimer, 1898年）
- D『Baron Richthofen's Letters, 1870-1872 Second Edition（リヒトホーフエン男爵の旅行報告書第二巻）』（North-China Herald Office, Shanghai, 1872年, 1900年, 1903年, 1941年、各報告は1870年より1872年までその都度発表され、その後まとめて出版される。）⁽¹¹⁾
- E『Ferdinand von Richthofen's Tagebücher aus China（リヒトホーフエンの中国旅行日記）』（E. Tiessen 編著、Berlin: D. Reimer, 1907年）（上巻は第一回、第二回、第三回旅行の日記、中巻是北京付近見聞、第四回、第五回旅行の日記。下巻は第六回、第七回の旅行日記の予定であったが、未刊。）
- E—6『支那旅行日記上・中』（海老原正雄訳、慶應書房、1943年）（Eの訳書）
- F 諸論文等

[注 釈]

- (1) 唐毅編『鲁迅全集补遗续编』、22～41頁、上海出版公司1952年。
- (2) 薛毅『李希霍芬与中国煤田地质勘探略论』、『河南理工大学学报(社会科学版)』、第15卷第1期、2014年3月。张梅静『德国地质学家李希霍芬在华勘矿活动及其影响』、中国矿业大学、修士論文、2014年5月。
- (3) 李何林主编鲁迅博物馆鲁迅研究室编『鲁迅年谱(增订本)』、34～146頁、人民文学出版社2000年。
- (4) 周遐寿『鲁迅的故家』、『第三分三—南江堂、三二德文书』、190～192頁、人民文学出版社1981年。
- (5) 周树人『中国地质略论』、『第二外人之地质调查者』、4頁、『鲁迅全集第八卷』、『集外集拾遗补编』、人民文学出版社1981年。
- (6) 『鲁迅地质佚文』、4～7頁、叶淑穗、杨燕丽『关于新发现的鲁迅地质佚文的说明』、7,8頁、张锋、姜贵善『关于新发现的鲁迅地质佚文历史价值的分析考证』、9～13頁、鲁迅博物馆编『鲁迅研究月刊1991年第八期(总第112期)』。
- (7) 周树人、顾琅共著『中国矿产志』、59頁、陈漱渝编『鲁迅科学论著集』、人民文学出版社2012年。
- (8) 章鸿釗『中国地质学发展小史』、5,6頁、商务印书馆1937年。
- (9) E・フォン・ドリガルスキー著、高山洋吉訳『第一篇遺された偉大な足跡』、5～17頁、『リヒトホーフエン伝』、慶應書房1941年。
- (10) Richthofen『UEBERSICHT DER REISEN DES VERFASSERS IN CHINA(中国における著者の旅行の梗概)』、XXV II～XL II頁、『China Vol.1(中国第一卷)』、Berlin;D.Reimer1877年。
- (11) リヒトホーフエンの『中国旅行報告書』は、『China Vol.1』の『Bisherige Veröffentlichungen über des Verfassers Reisen in China(著者の中国旅行についての従来の発表)』(XI頁)によれば、上記三(2)の第1・第2・第3回旅行については正確となるようにと発表を著者が控え、第4回については資金を上海欧美商業会議所の関心のある商業交通の問題に関した事項のみ報告をしたと言い、この『第一卷』は発行されなかった。第5・第6・第7回目の旅行については、エルンスト・ティーセン著『第一篇遺された偉大な足跡』(121～145頁、高山洋吉訳『リヒトホーフエン伝』、慶應書房1941年)によれば、1870年より1872年まで第1より第6までその都度フォリオとして印刷され、第7より第11までは1872年にまとめて発表され、11回分の報告が『中国旅行報告書』として1900年出版されたと言う。また、郭双林、董习『李希霍芬与《李希霍芬男爵书信集》』(54頁、『史学月刊』2009年第11期)によれば、1872年、1903年、1941年に発行されたと言う。各フォリオを閲覧したとも考えられるが、11回分の『中国旅行報告書』を閲覧したと推定した。

(次号に続く 2019.6.6)